札幌大学総合論叢　第27号（2009年3月）

〈論文〉

転成名詞の別の見方*

山　橋　幸　子

1．はじめに

一般に，動詞は時制の接辞「-る/-た」とは結合するが，主格の接辞「-が」とは結合しないとされ，名詞は時制の接辞「-る/-た」とは結合しないが，主格の接辞「-が」とは結合するとされている。実際，「見る/見た」は時制の「-る/-た」と結合しているが，主格の「-が」とは結合しない（＊見-が)。一方，「鳥」は主格の「-が」とは結合するが（鳥-が)，時制の「-る/-た」とは結合しない（＊鳥-る/-た)。しかし，「さび（錆)」のように時制の「-る/-た」とも主格の「-が」とも結合する語がある。例えば，

（1）自転車にさび-がついた
（2）自転車がさび-た

において，（1）では「さび」は主格の「-が」と結合し，（2）では時制の「-た」と結合している。「こげ（焦げ)」にも同様のことが言える。

（3）パンにこげ-ができた
（4）パンがこげ-た

このような語は，一般に，動詞の連用形が名詞化した転成名詞（動詞連用形名詞，連用形名詞）とみなされている。言語に普遍的とされる名詞と動詞との二大区分の上に立脚した分析であり，古来より受け入れられている考えである。しかし，未解決の問題も多い。

本稿の目的は，先行研究とは異なり，「さび」や「こげ」等のように時制の「-る/

-た」とも主格の「-が」とも結合性を有する語は，意味的特徴と関っており，本来一つの同じ形態素であることを主張することにある。E. A. Nida（1949）の同一形態素の認定原理1を前提とし，当該の語が名詞と動詞との区分と対応しているとされる「もの」と「動き」（あるいは「対象」とその「過程」）という二項対立の考えとは対立する外界の存在を指示していることを，「さび」や「こげ」等可視的なものを表す語に焦点を当てて論証する。また，「釣り」等のように所謂子音動詞由来とされる転成名詞は，本来動詞とは別の語であることも述べる。分析は現在用いられている，日本語に最も基本的な和語の単純語を対象とし，漢語を含む外来語や複合語は省く。本稿の分析により，所謂転成名詞はこれまでとは異なる扱いを受け，日本語には存在しないことになり，従って，それまで抱えていた問題は解決される。しかし，品詞論の出発点とされ言語に普遍的とされる名詞と動詞との区分（E. Sapir 1921，P. J. Hopper & S. A. Thompson 1984，Schachter 1985 他参照）の意義は曖昧になる。

本稿の構成は以下の通りである。2節で転成分析とその問題点をまとめる。3節で提案のためのバックグランドを述べ，4節で主格の接辞とも時制の接辞とも結合可能な語の意味分析を行う。5節で本稿を結ぶ。

2．転成分析とその問題点

日本語の動詞には「する」と「来る」の不規則動詞以外に，語基[1]が母音で終わる母音動詞と子音で終わる子音動詞がある（B. Bloch 1946，森岡健二 1994，鈴木重幸 1996 他参照）。「見る」'mi̲-(ru)' や「食べる」'tabe̲-(ru)' 等の所謂一段動詞が前者に相当し，「動く」'ugok̲-(u)' 等の五段動詞が後者に相当する。転成は母音動詞にも子音動詞にも起こるとされており，「動詞の諸活用形中の一形である連用形が，そのままの形で名詞に転化するという，簡単な方式（西尾寅弥 1961：61）」により形成されるもので，[2] 語構成論という観点からは，ゼロ接辞の結合による一種の派生語として古くから受け入れられている（坂倉篤義 1997：20 参照）。従って，「錆が」の「錆」は「錆びる」の連用形「錆び（ます）」が転成したものであり，「動きが」の「動き」は「動く」の連用形「動き（ます）」が転成した名詞とされている。

転成名詞に関しては，意味論的分析を中心にこれまでに多くの提案がなされている（宮島達夫 1957，西尾寅弥 1961・1967・1988，岡村正章 1995 他）。例えば，転成名詞の意味に関し，西尾（1961）は宮島（1957）の考察を発展させ以下のような分類を行っている。

（5）転成名詞の意味分類

①動作・作用等

イ）動作・作用そのもの：泳ぎ，調べ，貸し出し他

ロ）動作・作用の内容：考え，教え，望み，悩み，願い他

ハ）動作・作用のありさま・方法・程度・具合・感じ等：滑り，出来他

②動作・作用の所産・結果

イ）他動詞から：包み，貯え，堀，綴じ込み他

ロ）自動詞から：余り，固まり，氷，集まり他

③動作・作用の主体

イ）主体が人である場合：どもり，すり，酔っ払い他

ロ）主体が人以外である場合：流れ，妨げ，支え

④動作・作用の客体：つまみ，はおり，差し入れ，雇い他

⑤動作・作用の手段：はかり，はさみ，はたき，缶切り他

⑥動作・作用の向けられる目標：こぼし，糸巻き，ようじ入れ他

⑦動作・作用の行われる場所：通り，受付け他

⑧動作・作用の行われる時間：暮れ，夜明け，終り他

（西尾 1961：70-71 より。一部略）

つまり，転成名詞の意味は，「泳ぎ」等の動作・作用そのものから「はかり，はさみ」等動作・作用の手段や「通り」等動作・作用の場所に至るまで非常に多岐に渡っており，この考えは現在も尚基本的に受け入れられている。しかし，問題も多く抱えている。

第一に，日本語のアクセントは語の区別という重要な機能を持っているが，金田一春彦（2006）によると，転成名詞のアクセントは「原則として，もとのアクセントが平板式なら平板式，起伏式なら起伏式（ほとんどが尾高型）になる。もとのアクセントの式を変えない（付録　p. 12)。」このことは，確かに「錆び」等母音動詞由来とされる転成名詞の場合には言える。（上線は高く発音され，｜は後続音が下がることを示す。金田一春彦 2006：325 参照。）

（6）a. *sabi̅|-ru*　　b. *sabi̅|-ga*

「こげ，はげ，かび」等にも同様のことが言える。しかし，子音動詞由来とされる転成名詞の場合には，下記に示すように必ずしもそうではない。（同上　p. 68　p. 824 参照）

（7）a. *ugo|k-u* vs *ugoki-ga*　　b. *muk-u* vs *mu|ki-ga*

（7）aには，動詞「動く」はgoの音節が高く起伏式であるのに対し，転成名詞とされる「動き（が）」の場合には，goki-gaが高くなっておりアクセントがなく，平板式に変わっていることが示されている。同様の違いが（7）bにも見られる。この他にも「頼み，乾き」等動詞とアクセント式の異なるものを探すのは難しくない（金田一春彦2006参照）。

第二に，全ての動詞が名詞に転成する訳ではなく，「＊見-が」，「＊掛け-が」のように名詞として容認されない語も多い。従って，どのような動詞が転成名詞になるのかその判断基準が必要であるが，未解決のままである。実際問題，前述の（5）に示されているように広大な意味範囲に渡る転成名詞を，本来の名詞と区別するのは至難の業である。例えば，道具としての「はさみ」（転成名詞）と「針」（名詞）とを区別し，場所としての「通り」（転成名詞）と「道」（名詞）とを区別し，更に，動作・作用の客体「はおり」（転成名詞）を「帯」（名詞）と区別する判断基準をどのように定めることができるのだろうか。国広哲弥（2002）も，「『別れ』はあるが『会い』はない。釣りで『今日は食いがよくない。』とは言うが，『今日のお客さんは食べがよくないね。』とは言えない。ここには何らかの意味的制約があるのか，単なる慣れの問題なのか，よく分らない（p. 77）」と述べている。従って，転成名詞の扱いも個々人の判断により異なっている。例えば「ささくれ」は，北原保雄他（2001）では本来の名詞，池原悟他（1997）及び大槻文彦（1982）では転成名詞である。又，「汚れ」は北原保雄他（2001）及び池原悟他（1997）では転成名詞，大槻文彦（1982）では本来の名詞である。

更に，名詞という品詞を統一的に扱うという観点からも問題である。例えば，「山」等所謂本来の名詞の場合は，核をなす語基も，より大きな単位としての単語も同じ形態素である。従って，「山」の語基は「山」であるが，それ自体に主格の「-が」との結合性がある（山-が）。「山」の場合と同じことが所謂母音動詞由来とされる転成名詞にも言える。例えば，「こげる」の語基は「こげ」であり，転成名詞も「こげ」である。従って，転成名詞「こげ」の語基は「-が」と結合可能である（こげ-が）。しかし，「動き」等子音動詞由来とされる転成名詞にはこのようなことが言えない。語源とされる動詞「動く」の語基は‘ugok’であるがこの場合，基本的に開音節という日本語の音の特徴上，連用形にはそれ自体意味を持たないつなぎとしての形態素‘-i’が加わる（上山あゆみ1991：49-50参照）。従って，「動く」の連用形「動き」の構造は‘ugok-i’である。この形態素がそのまま名詞に転成するわけだから，「動き-が」の構造は‘ugok-i-ga’である。即ち，主

格の「-が」は，語基‘ugok-’に‘-i’の付いた，独立できる単位としての連用形‘ugok-i’に結合するのであって，語基自体には結合できない（* ugok-ga)。つまり，子音動詞由来の転成名詞は，主格の「-が」との結合性という点において，本来の名詞と同じ特徴を持っていないということである。換言すると，転成分析の下では，日本語の名詞には主格の「が」との結合性において異なる語基が混在しているということであり，品詞を一貫して統一的に扱うという態度とは異なる。

最後に，転成名詞は名詞と動詞との二大区分を前提としたゼロ接辞の付加による派生語とされているが，しかし，形式的に何らの付加の無いものが，何故対極的な関係にある品詞に転成するのか，本質的な説明はなく，形態素の側に立つと公平な扱いとは言えない。形態素をどういうものとして扱おうとするのか，ここには言語研究の根幹に関る問題が関っている。

本稿は，時制の「-る/-た」と主格の「-が」との結合性を持つ語（語基）は本来同一であると考え，これらの語基の意味との関りを論証する。

3．バックグランド

分析に入る前に，バックグランドとして理論的背景と語の構成要素としての形態素について概観する。

単語の構成要素は，基本的に実質的意味概念を有する形態素と機能的意味を有する形態素に分けられる。「語基」は実質的意味概念を有する形態素であり，語の土台・核となる音素レベルで取り出せる最小の不変化部分の形態素である（B. Bloch 1946，鈴木重幸 1996，仁田義雄他 2000 他)。時制の「-る/-た」及び主格の「-が」は機能的意味を有する形態素であり，単独に用いられることがないので拘束形態素つまり接辞である（森岡健二 1994，鈴木重幸 1996 他)。S. Steele（1988）によると，ルイセーノ語（南カリフォルニアで話されている Uto-Aztecan 語）の語彙要素 base（語基）は possessive（所有格）及び absolutive（絶対格）の接辞との結合性を基に区分され，意味上の区分と対応する。[3] 日本語にも同様のことが適用できる。つまり，語基は上記の時制と主格の拘束形態素との結合性に基づき分類できる。[4] 例えば，「鳥」の語基は‘tori’であり，主格の「-が」とは結合性があるが，時制「-る/-た」とは結合性がない（tori-ga; * tori-ru/-ta)。「山」も同じである（yama-ga; * yama-ru/-ta)。一方，「食べる」の語基は‘tabe-’であり，主格の「-が」とは結合性はないが時制「-る/-た」とは結合性がある（tabe-ru/-ta; * tabe-ga)。「見る」にも「食べる」と同じことが言える（mi-ru/ta; * mi-ga)。注目の転成名

詞の場合は，以下のようになる。

転成名詞はこれまで，全て一くくりに扱われていたが，子音動詞由来の名詞と母音動詞由来の名詞とは異なった集団に分類される。例えば，問題の「さび」の語基は‘sabi-’であるが，この形態素に関しては，論理上次の三つの見方が可能である：①時制の「-る/-た」と結合する形態素「さび」と，主格の「-が」と結合する形態素「さび」とは別々の形態素である；②時制の「-る/-た」と結合する形態素「さびる」があり，それが派生して主格の「-が」と結合する語が形成される（つまり，転成分析の立場）；③時制の「-る/-た」とも主格の「-が」とも結合性を持つ一つの同じ形態素である。E. A. Nida（1949）の *Morphology*：*THE DESCRIPTIVE ANALYSIS OF WORD* で提案されている同一形態素の認定原理1――「いかなる現われ（occurrence）においても，共通の意味特質（semantic distinction）と同一の音素形式（phonetic form）をもつ言語形式は，一つの形態素を構成する（森岡健二 1994：136）」[5]――によると，上記の③にあるように同一の形態素と捉えることができる。実際，前述の（6）ように「さびる」の「さび」も「さびが」の「さび」も，同一のアクセントパターンを持つ同一の音素形式‘sabi’である。また，「さび-が」と「さび-た」を含んだ前述の例文，

（8）自転車に<u>さび-が</u>ついた　（＝1）
（9）自転車が<u>さび-た</u>　（＝2）

は，基本的に同じ事態を表しており，「さび-が」の「さび」と「さび-る/た」の「さび」とは意味的相関性があり同一の形態素と見なすことができる。従って，「さび」は所謂名詞と動詞との二極対立的な区分の考えとは相反する形態素，つまり，時制「-る/-た」とも主格「-が」とも結合する第三のタイプ（「＋時制，＋主格」）の形態素ということになる。しかし，子音動詞由来とされる転成名詞の場合は異なる。例えば，子音動詞「動く」由来の名詞とされる「動き」は，「鳥」等と同じ特徴を持つ。つまり，「動き」の語基は‘ugoki’であり，主格の「-が」とは結合するが，時制の「-る/-た」とは結合しない（ugoki-ga; * ugoki-ru/ta）。しかし，語源とされる動詞「動く」の語基は，‘ugok-’であり，時制の「-る/-た」とは結合するが主格の「-が」とは結合せず（ugok-u/ta; * ugok-ga），「食べる」等と同じである。換言すると，「動く」と「動き」とは当該の両接辞との結合性という観点からは，前者は「山，鳥」等と同様「－時制，＋主格」の特徴を持つ語（語基）であり，後者は「食べる，見る」等と同様，「＋時制，－主格」の特徴を持つ語（語基）として存在しているということである。実際，「動く」は行為そのものを

指すが，「動き」は行為の概念を指し，意味的にも両者は区別できる。更に，前述の（7）で見たように，両者のアクセントパターンが必ずしも同じではないこともこの見方が望ましいことを示している。このことは子音動詞由来とされる転成名詞全てに言える。つまり，「はたき」の語基は 'hataki' であり（hataki-ga; * hataki-ru/ta）の特徴を持つが，「はたく」の語基は 'hatak-' であり（* hatak-ga; hatak-u/ta）の特徴を持つ。「どもり，氷，はおり，つまみ，浮き，通り」等他の子音動詞由来の転成名詞全てに言え，これまで語源とされてきた動詞「どもる，氷る，はおる，つまむ，浮く，通る」とは異なる別の語として存在しているということである。

4．「＋時制，＋主格」の語の意味分析

上に，時制の「-る/-た」と主格の「-が」との結合性を基に，語基は区別され，母音動詞由来とされる転成名詞は時制とも主格とも結合する集団（「＋時制，＋主格」）の形態素であることを述べた。ここではこれらの語基の意味的象徴について詳しく考察していく。

4.1. 「－時制，＋主格」及び「＋時制，－主格」の意味的特徴

注目の集団（「＋時制，＋主格」）に入る前に，目的の意味分析と関るので，「－時制，＋主格」及び「＋時制，－主格」の集団の意味的特徴について国立国語研究所編（2004）を基に概観する。「－時制，＋主格」の集団には，固有名詞の他に，具体的なものとしての人「子供，父」，動物「鳥，犬」，植物「桜，花」，天体「太陽，月」等の自然物と，「本，家，パン，刀」等の人工物を指示する語があり，また，「夢，愛，心」等の抽象的な概念を指示する語がある。一方，「＋時制，－主格」の集団に属する語には，身体的行為を指示する「笑う，泣く，飲む，飛ぶ，走る，寝る，食べる，歌う」等の語が含まれる。また，「枯れる，増える，減る，乾く」等の過程を指すものや「居る，ある」等存在の状態を指すものもこの集団に属する。換言すると，「－時制，＋主格」の集団には「もの」あるいは「対象」を指示する所謂名詞の多くが属し，「＋時制，－主格」の集団にはものの属性としての「動き」や「過程」等を指示する所謂動詞の多くが属する。従って，「ものと動きとは対立的で，二極的である（村木 1996：25）」。そしてその対象としてのものは名詞として，過程や動きは動詞として，異なる単語に分化する（同上参照）という名詞と動詞との二極対立の考えと一見一致している。しかし，「さび」も「もの」である。つまり，「＋時制，＋主格」の集団に属する語も「－時制，＋主格」の所謂名詞のように

「もの」を指示しているということである。これらの語の指示する「もの」にはどのような特徴があるのだろうか。以下，「＋時制，＋主格」の集団について考察していく。

4.2. 「＋時制，＋主格」

4.2.1. 「＋時制，＋主格」の成員

最初に「＋時制，＋主格」に属する語（語基）の成員をあきらかにする。これらの特徴を持つ語は，上記の二つの集団と比べ多くはないが，例外とする程少なくはない。所謂一段動詞のみがこの集団に属する。但し，一段動詞が全てこの集団に属する訳ではない。西尾寅弥・宮島達夫（1972）の「Ⅳ語末からの逆引きによる動詞一覧」（pp. 238-241）には現在用いられている一段動詞が550程挙げられている。これらを対象として，前述のようにNida（1949）の同一形態素の認定原理1に従い，アクセントパターン（金田一春彦2006参照）及び意味的相関性を基に抽出したところ，以下の80余の語をこの集団の成員として抽出した。

(10) 飽き，憧れ，諦め，甘え，いじめ，いましめ，訴え，遅れ，押さえ，教え，恐れ，落ち，衰え，おびえ，かすれ，かび（黴），かぶれ，構え，借り，考え，悔い，腐れ，くびれ，暮れ，けがれ，こげ，こじれ，答え，心得，こび，支え，ささくれ，定め，さび（錆），しつけ，しびれ，しみ，しめつけ，知らせ，調べ，ずれ，責め，備え，蓄え，ただれ，助け，例え，ちぢれ，疲れ，付け，詰め，勤め，照れ，届け，とぼけ，流れ，なれ，抜け，ねじれ，伸び，のぼせ，はげ，始め，はずれ，はれ（腫），冷え，震え，ぼけ，ほころび，ほつれ，控え，負け，まとめ，真似，乱れ，儲け，もつれ，漏れ，やつれ，揺れ，汚れ，別れ

多少の変動はあるかもしれないが，基本的に上記の形態素が「＋時制，＋主格」の集団の成員の全てである。これらは「＋時制，－主格」や「－時制，＋主格」の成員と意味上どのように異なるのであろうか。

4.2.2. 「＋時制，＋主格」の語の意味分析

この集団には，明らかに意味上の制約がある。「－時制，＋主格」の集団の語のように，主格「-が」と結合性があるにも関らず，固有名詞は無く，人工物や天体，天候，動物等の自然物を指す語も一切含まれていない。また，「＋時制，－主格」の語のように時制の「-る/-た」と結合性があるにも関らず，身体的行為や存在の状態を指す語も含ま

れていない。これらは，以下のように描くことのできる可視的なものを表す語（語基）とそうでないものとに分けることができる。

(11) A. 可視的なもの

黴，かぶれ，かすれ，腐れ，くびれ，こげ，ささくれ，錆，しみ，ずれ，ただれ，縮れ，流れ，禿，腫れ，綻び，ほつれ，ねじれ，もつれ，乱れ，汚れ

B. 可視的でないもの

飽き，憧れ，諦め，甘え，いじめ，いましめ，訴え，遅れ，押さえ，教え，恐れ，落ち，衰え，おびえ，構え，借り，考え，悔い，暮れ，けがれ，こじれ，答え，心得，こび，支え，定め，しつけ，しびれ，しめつけ，知らせ，調べ，責め，備え，蓄え，助け，例え，疲れ，付け，詰め，勤め，照れ，届け，とぼけ，なれ，抜け，伸び，のぼせ，始め，はずれ，冷え，震え，ぼけ，控え，負け，まとめ，真似，儲け，漏れ，やつれ，揺れ，別れ

以下，可視的なものを表す語に焦点を当て，その意味的特徴を明らかにしていく。

4.2.3. 「＋時制，＋主格」の指示対象：可視的なものを中心に

ここでは特に，「＋時制，＋主格」の語の指示対象，中でも可視的なものの代表として「錆」と「黴」の特徴に焦点を当てて考察する。4.1. で概観したように，外界の具体物は自然物と人工物とに大別される。注目の「錆」も「黴」も自然物である。国立国語研究所（2004）及び池原悟他（1997）によると，「錆」は塵埃等に分類される自然物であり，「黴」は菌類の植物である。しかし，「錆」や「黴」は「－時制，＋主格」の語の指す自然物とは異なる。例えば，「鉄鉱石」や「塵」等の自然物は，自然界に自然に存在しているが，「錆」はそうではない。前述の例や下記の例が示すように，「－時制，＋主格」の特徴を持つ語の指す人工物（自転車，包丁，鍋，鐘，鎖）を場として存在する。実際，下記の例文

(12) <u>包丁に</u> 錆がついた

において，「包丁」には場所を表す接辞「に」が後接し，「錆」の存在の場であることが示されている。しかし，「錆」は「包丁」等に，当然のものとして常に存在しているわけで

はない。本来ならないものである。また，実験等の特別な場合を除いては，人の意志行為が関って存在するものでもない。存在の場となる例えば，「自転車」や「包丁」の材料である「鉄」等の金属に特定の条件下で状態変化が起こった時に必然的に存在するようになる。この時の状態変化が「錆びる」という現象であり，化学的には，水の存在下で鉄のイオン化が起こって，2価鉄の水酸化物が生成され，それが酸化して酸化鉄，つまり「錆」ができる迄の化学変化を指す。[6] 換言すると，「錆びる」という現象は「割れる」等の単なる状態変化とは異なり，「錆」の存在を前提としている。実際，「錆」が状態変化の最終段階で結果産物として生成されて初めて「錆びる」が成立するのであって，「錆」が生成されなければ「錆びる」は存在しない。従って，化学現象という観点からは「錆」と「錆びる」とは，「－時制，＋主格」の表すものと「＋時制，－主格」の表す過程や状態の場合のように切り離したり対比させたりすることはできない。つまり，「錆」と「錆びる」とは，「ものと動き」あるいは「対象と過程」というように対立させることのできるものではなく，両者が一つの存在として存在しているということである。また，結果産物としての「錆」は，人間の素朴な日常生活の観点からは好ましくないものである。同様に好ましくないものとして「傷」もあるが，「錆」とは異なる。「傷」は「物の表面や皮膚などが他のもののせいで損なわれた部分。多く切ったり刺したりしてできたもの（柴田武・山田進 2002：1079)」であり，人の行為がその存在に直接的に関る。実際，「傷をつける（な)」とは言うが「＊錆をつける（な)」とは言わない。「へこみ」や「ひび」も「傷」と同様に捉えることができる。

「錆」と同様のことが「黴」にも言える。「黴」は，「餅」等の食品，衣類，履物，家具，絨緞，風呂場等の人工物の他，「みかん」等の自然物等様々なものに発生する（宮地誠 2001 参照）が，場となるものは全て「－時制，＋主格」の語の指示対象である。そして，「錆」の場合同様，「黴」は好ましくないものであり，場となるものに常に存在する訳ではない。湿度と温度という一定の条件下で，栄養源となる故に「かびる」という現象が起き，その結果必然的に存在するようになる好ましくないものである。研究等特別の場合を除いて，人間の意志行為が直接関ることもない。実際，「餅に黴が生えた」とは言うが，「＊餅に黴を生やす」とは言わない。同様のことが，(11) A に挙げた語の指示対象全てに言える。下記の (13) は，それらの存在の場を例示したものである。

(13) (指の) ささくれ，(大根の) 腐れ，(皮膚の) かぶれ，(声・文字の) かすれ，(手首の) くびれ，(パンの) こげ，(布の) しみ，(印刷・地層の) ずれ，(耳たぶの) ただれ，(葉・繊維・髪の) ちぢれ，(テレビの画面の) 流れ，(木・コードの) ね

じれ，（字の）乱れ，（頭の）禿，（袖の）ほつれ，（指の）腫れ，（シャツの）ほころび，（髪・釣り糸の）もつれ，（服の）汚れ

以上述べたことを基に，「＋時制，＋主格」の特徴を持つ語（語基）の指示対象は，以下のように一般化できる。

(14)「＋時制，＋主格」の指示対象（可視的なもの）：

① 当然のものとして存在しているわけではなく，平常時には存在しないものである。

② 人間の意志行為とは関りなく，「－時制，＋主格」の指示する場となるものの状態変化の結果産物として必然的に存在するようになる好ましくないものである。

ここで当然，(14) の特徴を持つ存在物が，「－時制，＋主格」や「＋時制，－主格」等，他の形態論的特徴を持つ語基によって指示されることがないのかという疑問がわく。しかし，本稿はないと考える。

例えば，「もつれ」及び「もつれる」の類語に関し，柴田武・山田進（2002：1017）には以下の語彙が挙げられている。

(15)「もつれ」：絡み，絡み合い，縺れ，拗れ，乱麻，盤根錯節，繁簡

「もつれる」：絡まる，絡む，絡み合う，込み入る，入り組む，入り交じる，交錯する，錯雑する，錯綜する，纏綿する，縺れる，縺れ込む，こんがらがる，紛糾する，拗れる，手が込む

上記の語のうち，漢語及び合成語である「乱麻，繁簡，絡み合い，盤根錯節，絡み合う，込み入る，入り組む，入り交じる，交錯する，錯雑する，錯綜する，纏綿する，こんがらがる，紛糾する，拗れる，手が込む」は本稿の分析対象（単純和語）とは異なるので省かれる。また，「拗れ，拗れる」も「両者の仲」等抽象的なことのみに関るので省かれる。従って，残るのは「絡み，絡まる，絡む」のみである。しかし，これらはある一つのそのもの自体に起る状態変化ではなく，「たこ糸」と「電線」の場合のように，二つ以上のものが関る現象（柴田武他 1979：204 参照）を指し，「(釣り糸・髪等の）もつれ」とは異なる。以上のことから，唯一「＋時制，＋主格」の特徴を持つ語（語基）のみが，(14) に

挙げた特徴をもつものを指すと言える。換言すると，「＋時制，＋主格」の特徴を持つ語（語基）は対象とその属性（行為，過程を含む）というように，互いに分離させたり対比させたりすることのできない外界の存在を指す語として，「＋時制，－主格」の語とも「－時制，＋主格」の語とも異なる語として区別され，集団をなしていると言える。つまり，これらの語は所謂動詞が，「転成」の名の下に，名詞に相当する特徴を持つようになったわけではなく，その意味的特徴ゆえに本来両接辞と結合性を持つ語として集団をなしているということである。このように捉える方が形態素にとっては公平であり，同時にまた，日本語文法の簡略化にも繋がる。

5．む す び

本稿はNidaの同一形態素の原理を基に母音動詞由来とされる転成名詞を，時制の接辞「-る/-た」及び主格の接辞「-が」との結合性を持つ同一の語として捉え，その意味的特徴を，可視的なものを指す語に焦点を当てて考察した。そしてこれらの語が，平常時には存在しないものが，状態変化の結果産物として必然的に存在するようになるものを指すこと，つまり，これらの語が，形態論的特徴において名詞と動詞との区分に対立しているように，ものとその属性（動き・過程）との二区分とに対立する外界の存在物に対応していることを示した。換言すると，母音動詞由来とされる名詞は，本来，両接辞と結合性を有する同一の形態素であり，意味的特徴と関わっているということである。また，語基の時制「-る/-た」及び主格「-が」との結合性という観点から，「はかり，釣り」等所謂子音動詞由来とされる転成名詞は，本来動詞とは異なる別の語として扱われることも述べた。このように捉えることにより，日本語には転成名詞は存在しないことになり，従って，転成分析の抱えていた問題は解決される。しかし，品詞論の出発点とされ，言語に普遍的とされる名詞と動詞との区分の意義は曖昧になる。

＊本稿は平成18年度札幌大学校費留学研修制度による研修成果の一部である。

注

1．語基は，セクション3で詳述するが，実質概念的な意味を有する語の土台・核となる形態素を指す。
2．但し，大野晋（1978）によると，「（動詞の）連用形から名詞形が転成したのではない。連用形とは本来名詞形で，それは名詞語尾iがついて成立したものだった。（p. 203）」。
3．Steeleによる形式上の4区分と意味との関わりは以下の通りである。

①絶対格とは結合しないが所有格とは結合する語基（「－絶対格，＋所有格」）は，「頭」等体系の一部のものを指す。

②絶対格と結合するが所有格とは結合しない語基（「＋絶対格，－所有格」）は，自然界に自然に存在するものを指す。

③絶対格とも所有格とも結合する語基（「＋絶対格，＋所有格」）は，人工物あるいは人間が持てる自然界の物を指す。

④絶対格とも所有格とも結合しない語基（「－絶対格，－所有格」）は，行為あるいは状態を指す。

4．尚，時制を表す形態素には所謂形容詞に付く「-い/-かった」があり，また，名詞や形容動詞と共起する「-だ/-だった」も時制マーカーとされることがある。しかし，転成名詞に注目する本稿の目的とは直接的に関らないので，所謂動詞と共起する時制「-る/-た」のみを対象とし，これらは分析の対象から除く。

5．原文は，"Forms which have a common semantic distinctiveness and an identical phonemic form in all their occurrences constitute a single morpheme (E. A. Nida 1949：7)" である。

6．詳細は以下の通りである（井上勝也 1994：27 参照）。

（i）鉄（Fe）表面がイオン化して，２価の鉄イオンが溶け出，下記のように化学反応が起こる。

$Fe \longrightarrow Fe^{2+}$（２価の鉄イオン）＋ 2^{e^-}（余った電子）

（ii）上記の余った電子と水分子及び空気中の酸素との間で，次のように水酸化物イオンができる。

H_2O（水分子）＋ O_2（空気中の酸素）＋ $e^- \longrightarrow OH^-$（水酸化物イオン）

（iii）（i）と（ii）の反応が隣り合って起こり，２価鉄の水酸化物が次のように副次的にできる。

$Fe^{2+} + + 2OH^- \longrightarrow Fe(OH)_2$（２価鉄の水酸化物）

（iv）この２価鉄の水酸化物が空気中の酸素で酸化されて酸化鉄，つまり，錆（Fe_2O_3）ができる。

参考文献

池原悟・宮崎正弘・白井諭・横尾昭男・中岩浩己・小倉健太郎・大山芳史・林良彦（1997）『日本語語彙体系』岩波書店

井上勝也（1994）『錆をめぐる話題』裳華房

上山あゆみ（1991）『はじめての人の言語学―ことばの世界へ』くろしお出版

大槻文彦（1982）『新編大言海』冨山房

大野晋（1978）『日本語の文法を考える』岩波書店

岡村正章（1995）「「典型的な動詞連用形名詞」に関する一考察」『国文学論集 28』上智大学国文学会

北原保雄・久保田淳・谷脇理史・徳川宗賢・林大・前田富貴・松井栄一・渡辺実（2001）『日本国語大辞典 第二版』小学館

金田一春彦監修（2006）『新明解 日本語アクセント辞典』三省堂

国広哲弥（2002）「連用形転用名詞の新用法は異常か」『言語』vol. 31. No. 9. pp. 74-77. 大修館書店

国立国語研究所編（2004）『分類語彙表』大日本図書

坂倉篤義（1997）「語構成序説」斎藤倫明・石井正彦編『語構成』pp. 7-23. ひつじ書房

Sapir, Edward (1921) *Language*. New York: Harcourt.

Schachter, Paul (1985) "Parts of speech systems". In Timothy Shopen ed. *Language typology and syntactic description*, 3-61. Cambrigde: Cambridge University Press.

柴田武・国広哲弥・長島義郎・山田進・浅野百合子（1979）『ことばの意味２：辞書に書いていないこ

と』平凡社
柴田武・山田進編（2002）『類語大辞典』講談社
Steele, Susan (1988) "Lexical Categories and the Luiseno Absolutive: Another Perspective on the Universality of 'Noun' and 'Verb'," *International Journal of American Linguistics*, pp. 1-27, The University of Chicago.
鈴木重幸（1996）『形態論・序説』むぎ書房
Nida, Eugene A. (1949) *Morphology*：*THE DESCRIPTIVE ANALYSIS OF WORD*, The University of Michigan Press, Ann Arbor.
西尾寅弥（1961）「動詞連用形の名詞化に関する一考察」『国語学』pp. 60-81, 国語学会
西尾寅弥（1967）「品詞の転成」松村明・森岡健二・宮地裕・鈴木一彦編『講座 日本語の文法 3』pp. 257-273, 明治書院
西尾寅弥（1988）『現代語彙の研究』明治書院
西尾寅弥・宮島達夫（1972）『国立国語研究所資料集 7 動詞・形容詞問題語用例集』秀英出版
仁田義雄・村木新次郎・柴田方義・矢澤正人（2000）『日本語の文法 1 ：文の骨格』岩波書店
Hopper, Paul and Sandra Thompson (1984) "The discourse basis for lexicalcategories in universal grammar". *Language* 60: 703-52.
Bloch, Bernard (1946)「口語日本語の研究」ミラー, R. A. 編・林栄一監訳『ブロック日本語論考』(1980), 研究社
宮地誠（2001）『カビ博士奮闘記―私カビの味方です』講談社
宮島達夫（1957）『単語教育：講座・現代の用字・用語教育 2』春秋社
ミラー, R. A. 編・林栄一監訳（1980）『ブロック日本語論考』研究社
村木新次郎（1996）「意味と品詞分類」『国文学 解釈と鑑賞 776：品詞とはなにか』pp. 20-30, 至文堂
森岡健二（1994）『日本文法体系論』明治書院